

AI(人工知能)・IPW(多職種連携)時代の効果的・効率的な経過記録法

～生活支援記録法(F-SOAIP)の基礎から応用～

講師 小嶋章吾(国際医療福祉大学教授)・嵐末憲子(埼玉県立大学准教授)

生活モデルに基づく経過記録法

「生活支援記録法(F-SOAIP:エフ・アイ・ピー)」は、生活支援に関わる、医療・介護・福祉・心理・教育など異なる専門性をもつ人たちが、本人の QOL 向上を目指し、利用者を一人の人間として丸ごと理解し、より質の高いサービス提供に資する、経過記録の方法です。

さまざまな職種の人たちが「分かりやすく、活用しやすい」と評価する F-SOAIP についての講座が、2019 年 5 月から 7 月にかけて4日間(1回3時間)開かれました。首都圏を中心に大阪からも含め受講者は 19 人。介護保険や障害福祉などのサービス事業所や医療機関の従事者、学生相談室カウンセラー、介護福祉学・老年看護学や修復的対話を研究する大学教員、厚生労働省職員の参加もありました。

これまで、多職種連携が求められる介護施設や在宅医療・介護現場における記録は、面接をしたり、サービスを提供した人が、自らの実践について思い思いのスタイルで記述する「叙述形式」や、主に看護記録として普及している「問題志向型記録(SOAP)」や「フォーカスチャーティング(F-DAR)」等の「項目形式」が使われてきました。

しかし、「叙述形式」は「ダラダラ書き」と揶揄されるように、記録を残すことが目的化し、書いた本人以外には内容が伝わりづらいという大きな欠点が指摘されています。一方、「項目形式」は、いずれも“治す医療”を目的とする“医療モデル”に適した記録法であるものの、超高齢社会で求められる“治し支

える医療”や、当事者の生活を重視する“生活モデル”を目指す現場では、実践過程・思考過程が記録できないとの声が多くあがっています。

経過記録を6項目に整理

そこで講師らによって開発されたのが、生活支援記録法です。これは、ICF(国際生活機能分類)と生活場面面接の理論に基づき、PDCA に沿った経過記録の方法です。記録すべき情報や、他職種を含め関係者に伝えるべきことを、6項目(F-SOAIP)に整理して記述します。

- F: 着眼点(Focus: 記述内容を簡潔に表すタイトル・テーマ)
- S: 主観的情報(Subjective Data: 利用者やキーパーソンが発した言葉など)
- O: 客観的情報(Objective Data: 利用者に関するデータ、観察したこと、多職種から得た情報など)
- A: アセスメント(Assessment: 記録者本人による主観的情報や客観的情報に対する判断や解釈)
- I: 介入・実施事項(Intervention/Implementation: 記録者本人の対応)
- P: 計画(Plan: 当面の対応予定)

F-SOAIP のメリットのひとつは、大量の記録の中から、F の項目を追えば、支援経過の概要がすぐに分かること。また、項目ごとに短文で入力し、分析しやすいデータとして蓄積されるため、医療・介護・福祉現場等での ICT の導入がしやすくなります。さらに AI が活用の活用にもなじみ、これまでの経験値に頼っていた個別ケア法が、初心者にも分かりやすい知見として得られる

可能性があるのです。



ワークショップ形式の話し合いを重視した講座

実践力を養う講座

講座は、講義、ワークショップ、現場における実践報告で構成。毎回、ワークシートを記入する実践課題の提出や、講座での気づきや学びを現場でどのように生かしたか、自らの変化などを振り返りリフレクションを行い、参加者の間で共有しました。

「自分に足りない視点を自覚できる」「F に該当しない細かい部分を記録から除くようになった」「専門職の判断とは何かを考えた」「新人教育や外国人の教育に有効」など、さまざまな意見が出されました。

期待される“伝道師”の役割

今後は、F-SOAIP のメリットを感じた講座参加者が職場全体にどのように広げていくか、また、現場で使い、これまでの記録法との違いを体験すればメリットを実感しやすいため、本講座の受講者には、F-SOAIP をより多くの人たちに知ってもらう機会を増やすための“伝道師”の役割が期待されます。

平岩千代子(国際医療福祉大学大学院修士課程 医療福祉ジャーナリズム分野)